

工口事師たち

野坂昭如





エロ事師たち

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 112 A

昭和四十五年四月十五日 発行
昭和四十五年十月二十日 三刷

著 者 野 坂 昭 如

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一 六 二
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 東 京 (〇三)(二六〇)一一一
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

エロ事師たち

野坂昭如著

新潮社版

1925

エロ事師たち

一

いかにも今様の文化アパート、節穴だらけの床板の大形なきしみひとときわせわしく、つれて深く狎れきった女の喘鳴が、殷々とひびきわたる。ときおり一つ二つ、言葉がまじる。

「な、何いうとんのやろ、もうちょいどないかならんか」

スブやん、じれったげに畳に突っ伏し、テープレコーダーのスピーカーへ耳をすり寄せた。かたわらの、それが癖で滑稽なほどみじかい脚をチマチマツと両膝そろえて坐り、屑テープ丹念につなぎあわせる伴的、口をとがらせてつぶやく。

「あかんで、それで精一杯や。なんしアパートの天井裏いうたら電線だらけや、ハム入るのんしやアないわ」

なるほどそういわれると、きわめて抑揚に富む息づかいとは、対蹠的に無表情な低い雑音が、我物顔に入りこんでいて、この両者、音程がよう似てる。床下から録音されているとはつゆ知らず、多分、ベニヤ一枚へだてた両隣の耳をはばかってだろう、つけっぱなしのラジオは、かえって雑音をくぐり抜け、ハジンジンジタンジタンカタタタア、といと気楽にひびいていた。

「肝心のところがもう一つきけん。そやけどよう唸りはる女や」

スブやん、情けなく溜息つけば、伴的はなぐさめるように、「京都の染物屋の二号はんや、週

に二へんくらい旦だんつく来よんねん、丁度この二階やろ、始まったら天井ギイギイいうよってすぐわかるわ、もうええ年したおっさんやけど、達者なもんやで」

ちよいまち、とスブやん大形に手を上げ伴的をとめる。女がしゃべったのだ。

——あんだ、御飯食べていくやろ、味噌汁みそしるつくろか。

男はモゾモゾと応こたえ、ききとれぬ。と、突拍子もない声がスブやんの鼓膜にとびこんできた。

——お豆腐屋さん！ うっとこもらうよオ。

男再び何事かしやべり、女おかしそうに笑う。やがてドタドタとアパートの階段を乱暴にかけ上る音、ドアのノック、咳せきばらい。

——そこ置いとして頂戴ちやうだい、入れもんとお金は夕方と一緒にええやろ、すまんア。

しばし静寂の後、再び床板きしみ女は唸り、スブやんあっけにとられるのを、伴的ひと膝にじりよって、「やっとなる最中に飯のお菜たのみよったんや、ええ面つらの皮やで豆腐屋も」

スブやんこの説明をきくとひっくりかえって笑い出し、やがて「リアリテイあるやんか」といった。リアリテイは近頃スブやんの口癖である。というのも客の眼エや耳が肥えてきよったからで、まあたいがいのことにはおどろきやらん。テープ一つにしたところが、たとえば「雨の夜」と呼ばれる三十分物の、初めから終りまで女がいやいややと抵抗する異色篇も、これならとスブやんお顧客とくの尼ヶ崎の銘木屋へもちこんだが、中で男の「人間は運命に逆ってはいけないよ」という台辞せりふ一言に、それまで身をのり出してた餓鬼が、フィツと顔を上げ、「なあ、女口説く時、こんなこというあほおるかア。インチキ臭いで」とどのつまりが只聴ただきかれ。「そらみんな必死や

さかい、あほなことでもありますやろ」テープ中の男になりかわってスブやん弁解したが空しいのであった。

「考えてみたら東京弁があかんねんわ。あいつらの口きいてたら、ほんまのことかて嘘うそいうてるみたいや、感情こもってえへんちゅうのかな。雨の夜のテープかて、ヒトニハサダメガオマンネ、ナア、コレモアンタノサダメヤオマヘンカ、サダメニサカラワント、サ、ソノテエドケトクナハレ、とこういうとったら、あの餓鬼こゐろかて満足しよったんや」

スブやんの腹立ちまぎれの妙な声色こゐろをきいて、ほならいっちゃやったろかと、伴的ひきうけて出来たのがこのテープ。豆腐屋の他ほかに、これは隣り部屋はなの二階に住む南のアルサロの女給と客の痴語、床板のきしみとハムは同じだが、ただこの女給、歯アでもわるいんか、シーシーと音を立て、あげくの果てに男がふぬけた声で、「アーコノカンゲキ」と往生するのもあれば、また珍らしくも男がはなからさいごまで、「スキスキスキッ！ スキスキスキッ！」とわめきつつけるテープ。これは一部屋おいて隣りの学生と恋人の睦言むつごとだった。

「なんぼや、安うしといてや」

「一本、五千円ほどもろとこか」

伴的ふたたび坐り直して鼻水をすする。チエッこんな屑テープ使うてからに、しかも己おのれが住むアパートのあちやこちや盗みどりしよって元手はなんもかかっとらんやないかと心中ぼやき、だがこの三本それぞれええとこだけつなぎあわせて、リアリティ満点のエロテープ一本三千円はかたい、五十本プリントしたかてざっと十万のもうけやと、スブやん言い値で引き取った。

「あんじよう風邪かぜひいてもたで、徹夜で録音してんからなア」

「またおもしろいのあったら頼むわ。来しなこのアパートの端の部屋に、寿染めぬいた夫婦布団干したあったけど、あら新婚ちゃうか」

うれし恥かし新婚のいちやいやテープやったら、こら一本一万でも高たかうはない。

「聞くだけやったら世話ないねんけどな、テープにとるとなるところとこらぐつわるいわ。よっぽど感度ええマイク使うても、それだけハムも入るし」

さすがは伴的、心得てすでに録音をこころみていた。新婚は同じ階のはずれ、天井に忍んでマイクをセットしたが雑音が多い。いやそれより、二階にある便所の水洗の音が、間なしにガタガタシャアシャア、ときにはあたりはばからぬ放屁ほうひの音も入り、「なんやもう気色わるなって」あかん。さればと物干竿ものほしざおの節を抜き、中にコードを通してマイクを下げ、その上を洗濯物せんたくめかしたふんどしでおおい、新婚の窓辺べへさしのべてもみたけれど、これは屋外の、はるか遠い夜汽車の笛、車のクラクション、犬の遠吠えとおほに邪魔されて、それらしき物音はけも入っとらん。

「聞くだけやったらいうて、それどないすんねん」

あきらめぬスプやんに、伴的は、押入れを開け布団の間から医者あの聴診器をひっぱり出した。聴診器の先きはビニールのガス管に接続されている。

「このビニールの先きに漏斗ついたあんねん。そいで漏斗は新婚の部屋の天井にふせてあるちゅうわけや」

スプやん、幼き頃絵本でみたラッパの化物みたいな対空聴音機を思い出した。なんや知らんあ

れは二キロ先きのはえの音まできこえるいうとったなあ、つまり同じ原理やとすぐ腑におちる。

「ものすごうよう聴けまっさ。手にとる如くちゅう奴や」

「何時頃やりよんねん」

「そやな、ここにメモあるわ」

どこまでマメな奴やと感謝しながら、伴的のさし出すメモをみれば下手糞な字で、「日やうあさ七じ、女Q。月やうよる十時けんくわのあと泣いてQ。火やうナシ。水やう三びやう」などある。Qてなんや、なんやしらん終りしな嫁はんがキューいいはるねん。三びようは、旦那があつという間にすみはってんな、これには嫁はん文句いいはってたわ、なんや三秒もかからんいうてスブやんけつと笑い、これもいけるでエとうなずいた。このしかけさえあったら、十三でも銀橋でも、なんぼでもきける。こら新兵器や、そや運送屋の社長に売ってこましたろ、あの餓鬼、温泉マーク行っても肝心のことで、すぐ便所の天井から上あがって盗み聴きが趣味やねんからなア。

「実費四千円や。五会百貨店へ行ったら聴診器古いの仰山売とうわ、なんぼでも作るで」

伴的はうすら笑ってあたりを片づけはじめ、いっときも体おちつけぬ性分なのだ。元はといえば、元町に店を構える帽子屋の伴、写真道楽の末が、気の強い女房に閉口頓首。モデルと駆けおち同棲のいざこざあってやがて親から勘当受け、今は大阪城東の大宮町に侘び住いの身だが、写真の腕はもとより確か、他にさまざまな特技をもつ。

どないやトルコでもおごろか、風邪直るでえ、とスブやん伴的連れ立って表へ出れば、折しも

師走、シングルベエやらトリイやらの陰にかくれたエロの商売、今が狙い目稼ぎ時、皎々と冴えわたる冬の月にも、心はずみ、つい鼻唄に「セントゴーマーチン——」。

スブやん実は酢豚の略。豚のように肥ってはいいても、どこやはかなく悲しげな風情に由来するあだ名であった。戸籍上の姓名は、今は警察の公安課のみぞ知る、表向き喜早時貴とたいそうな名前で、堂ビルの裏に月五千円の電話番号つきデスクを借り受けここが連絡事務所。そのビジネスについて彼は、いやスブやん一党の仲間達はお互いエロ事師と称している。

千林の雑踏かき分け、二人は駅裏のトルコへ入ったが、客があふれて待合室の椅子にさえ坐れぬ。

「現金なもんやで、このトルコ、いらわすちゅうの皆知つとんやな」

ジャンパーに赤い靴下のイモあんちゃん、格子の背広に蝶ネクタイのセールスマン、ラッパズボンに貸ボートみたいな靴はバーテンか、親指と人差指で煙草つまんでせわしのう灰おとしとんのはボロ電の学生やろ。じろじろ眺め渡すスブやんに、伴的は妙にあらたまった口調でいった。

「ぼくは、あれ邪道や思うねえ」

「邪道てなにがや、スペシャルか」

「スペシャルはええけど、いらわすのはあかんわ。やっぱしトルコはトルコらしゅうせな」

なんでや、と問い返えすスブやんに、つまりトルコの女は技術者やねんなア。五本の指で、男の性感帯をあんじよう刺激してやな、それで楽しませるのが本来の在り方や。それを男にいらわさすやろ、いらわさすのは技術のいたるところをカバーしよるんやなあ、料理でいうたら鯉節

や昆布こんぶでダシとらんとからに、科学調味料でごま化すみたいなんやで。いったんいらわしたら、今度めに男はその先きを要求しよる、それが先きへ先きへすすんでみいな、なんのこっちゃ当り前の色事と同じになつてまう。わいはあのスペシャルちゅうもんは、絶対にあれの代用品とはちやう思うし、そいでのうたらどこにトルコの意味合いあんねん。飛田とばたでも今里いまざとでも姫買ひめかひしたらええやねんか。あないしてマッサージ台の上ねころんで、まあいうたら赤ん坊みたいにな、すべてもうあちらまかせで、こちやらはただ眼エつむってなんも考えへん。女がどないな顔してるか、なに思とるか、どうでもよろし。五本の指で男の氣づかん、いや女房やらなんやらの知らんかった男のつぼを探し出して、やさしゅうしてもら、それがスペシャルの醍醐味だいごみちゅうもんよ。いやもつというたらな、スペシャルは男ばかりがようなつて、女はなにも感じたらあかんもんやねん。つまりやな、あれはお母はんにしてもらうような感じでなかあかん。

「お母はん？　なんでお母はんがでてくんねな」

それまでは聞き流していたスブやん、なんとも場ちがいな言葉に耳つかえて問い返えす。

「お母はんの愛情ちゅうもんは、こうなんちゅうたらええかな、サービスええやんか、献身的やろ。そいでちよと残酷なところもあるわ、スペシャルで男が往生するやろ、その時にイヤーやらアラアラやらいうて女がタオルでふきますわな。あの時、なんやお母はんによつ似てる思うねん。男はもうその時必死やで、なんやしらんけどすがりついとるわ、そやけど女はまるでへっさでおる、それがどうもお母はんとは赤ん坊の関係みたいなんやな」

フーンそら伴的、あんたママコンプレックスいうのとちやうか。いやようわからんけど、なん

セトルコはそういうもんや思うわ。

「十八番さん、十八番さん、おりはらへんのん」

がさつな声に呼び立てられ、ひよいと整理札みれば十八番は伴的。「マアお母はんにかわいがってもらいや」スブやん肩をたたくと、伴的鼻をすすり上げ、水着姿二十貫はあろうかという女に引っ立てられて姿を消した。

スブやんみたところ四十も少し出た感じだが実はとって三十五歳、母は十七年前、神戸空襲で死んだ。はじめな死にさまであった。父は戦地へ駆り出され、母一人子一人細々と洋服のつくろいで過ごすうち、過労のためかそれまでも病身だった母の腰が抜けた。スブやん中島飛行機へ勤め、勤労特配などあつてかつかつ喰うには困らなかつたが、さてB二九が白い飛行機雲空になびかせはじめては、母の始末に窮した。疎開するとたよる血縁はなく、家は湊川神社のすぐ横でいわば神戸の中心、そうでなくても、アメリカは楠公さん焼くそうやとデマがとびかい、どうころんでも助かる道はない。そして二十年三月十七日、パンパンと今から思えばクリスマスツリーのようにながらな音が焼夷弾の皮切りで、「おちましたでえ」というより火の粉煙が先きに立ち、「お母ちゃんどないしょ」「ええから逃げなはれ」上半身起してスブやんをみつめる姿に、かなわぬと知りつつ後からかかえて二歩三歩、とてもその軽さに泣くゆとりはない。「お母ちゃんに布団かけて、はよかけて」スブやんいまはこれまでと布団ひきずり出し、一枚かけては防火用水のバケツぶちまけ、また一枚おおつては水道の水を汲み、せめてこれでなんとか持ちこたえてえなど、これは切端つまって親子二人考え出した非常時の処置であつた。

そのまま母の無事を祈るいとまなく、楠公さんのきわの電車道にとび出せば、すでに町内は逃げたのか人影もみえず、ただ湊川神社の木立ちめらめらと焰ほのおをあげ、今までいた家並みそろって黒煙を吐き出している。しかもひっきりなしに、あの荒磯あらいそを波のひくようなザアザアという爆弾の落下音が轟とどろき、思わず伏せてバケツを頭にかぶったスプやんの、ほんの二米メートル先きを、まるで筍たけのこの生えそろうたように焼夷弾びっしりと植わって、いっせいに火を吹いた。

翌日、まだうっかりすると燃えつきそうに熱い焼跡を、警防団が母を掘り出したが、幾枚かけたか覚えのない布団の、下二枚は焦げ目もなく、そして最後にお母ちゃんがあらわれた。全身うすい焦茶色となり、髪の毛だけが妙に水々しく、苦悶くもんの色はみえなかった。

「黒焦げになって、猿みたいにちちこまった仏さんもようけいてはるのや。こないに五体満足なだけましやで」

警防団員の一人が肩にまわり、一人が脚あしを持とうとすると、まるで金魚すくいの紙が破れるみたいに、お母ちゃんの体はフワッと肉がくずれ骨がみえた。ウツと口を押さえとびすかった警防団、ややしばし後に「しゃアないわ、スコップですくお」と、そのスコップの動きにつれて、指の一本一本の肉までがきれいにはがれ、くだけ、最後はこれもまるでオブラートの如くたわいない寝巻きとごちゃまぜにむしろの担架に積み上げられたのだった。スプやんはただ立ちすくみ、今もかしわの蒸し焼きだけは見る気もしない。

病身ではあったが気の強い女で、戦地へおもむく夫を送る朝、喧嘩けんかをした。「後ようたのむでえ」と、町内の歓送会へでかけるきわに親父がいい、つけ加えてついスプやんのズボンのほころ

びを、「はよつくろうたりや」といったのは小店ながらも洋服屋の職人、それが母の気にさわった。「これから譽れの出征やいうのに、なにぞたごたいうてはるのん、女みたいに」と怒鳴り、すでに高小一年だったスブやんのズボンまたたく間にすり下げると、部屋のすみにはうり投げ、「ぐずぐずせんと、他所^{よそ}いきの服着なさい」とこき、父はそれに抗弁もせず、玄関の前の路地で、顎^{あご}を埋めるようにしながら、応召の赤だすきを直していた。

母、いやスブやんにとっても、これが父の最後の姿となった。

「スペシャルとお母はんか、おもしろいこといいよんな、そやけどあの母親やったら、どうも感じでんで、おそろしかったもんなあ」

まだまわらぬトルコの順番を待って、伴的の言葉に否応なし母親のあれこれ想い浮かべたスブやんだが、まるでピンとこない。

母親の気の強いのは、その生理的欠陥にあるようだった。小学生の頃、玄関を入ると、いや八軒長屋のその路地を少し入ると、長火鉢^{ながび}の銅壺^{どうこ}で煎^{せん}じる実母散やら中将湯^{ちゅうじやうとう}の臭^{にお}いがした。便所のおとし紙の下に、珍らしくなったチヨコレートの銀紙をみつけ、「ウワお母ちゃん便所でチヨコレート食べとんね、ずるいわ」といって、いやという程横面^{よこつら}張られたこともある。チヨコレートではなくて坐薬だと知ったのははるか後になってからだ、この時の記憶をそれほど長く持ちつづけたのは、もちろんチヨコレートに対する執念ではなくて、その時の母のすさまじい表情、自らの女としての欠陥を子供に見破られた口惜^{くや}しさが、スブやんの心に灼^やきついていたらだろう。「あのお母ちゃんとお父ちゃん、ほんま寝とったんかいな、もっとも寝たからわいが生れたちゅ

「うわけやけど」思わず苦笑するところへ、「いやらしわこの人にたにた笑うてから、はよおいはれな」スブやんの女が呼んだ。

以前は旅館であつたのを、そのまま居抜きでトルコに仕立て、襖ふすまを開けると畳の上にマッサージ台があり、床の間を少し張り出してそこがトルコ風呂、体を洗うのは共同浴場だが、その客はなく、スブやんの通された部屋も冷えきっていて、どうも蒸し風呂にすらスチームの通る気配はみえぬ。

「蒸してんか、くたびれとんね」

「ほなもつとはよこなあかんわ。この時間やったら特別オンリーや」

「特別でなんやねん」

しらばっくれてきくと、うちの方からいわれへん、お客さんの思おもひ召し次第やもん、ほな千円やるわ、あと二百円つけてえなどのやりとりあって、たちまち女はスブやんのズボンをはぎにかかり、このあたりたしかに父親出征の朝の母に似ていたが、さすがボンとほうりはせず、座敷にふさわしい古びた衣い桁きへかけた。

女は当然のようにスブやんの手をとると、「二本指あかんよ、一本だけやし」と自分の下着へ導く。スブやんあわてて、「わしそれあかんねん、なんにもせんでええから、あんただけやって」ふだんなら二本指どころかけつのケバまで抜いたろかというスブやんだが、今は伴的の説が心に残っている。

「お客さんここはじめて」「ウン」「なんでいややのん」「なんでもや」「けったいな人」「うるさ